

<p>○ 家庭訪問をし、A男の最近の努力について具体的な場面を取り上げてほめる。また、家庭でもA男のよいところを認め、ほめるように話す。</p> <p>○ 同分母分数のたし算の理解が、思うようにできないので、放課後、簡単な整数のたし算をさせ、できた実感を持たせる。</p> <p>○ A男が、授業の中で積極的に挙手をするようになってきたので、級友の前でほめる。</p>	<p>○ 級友もA男のよさを認め、「A男君、頑張ったね。」と言葉をかける。</p>	<p>○ 両親の前ではめられうれしそうな表情がみられた。（担任が帰った後両親からほめられたことを翌日笑顔で報告した。）</p> <p>○ 「また、明日も頑張るからね。」と言って元気よく帰る。</p> <p>○ 担任や級友から認められ、にこにことうれしそうな笑顔が見られる。</p>
--	---	--

5. まとめ

多動傾向（LD）のため担任や級友から認められることが少なく、疎外感、孤独感を感じて集団に適応することができなかったA男であったが、担任が教育センターと連携を図り、受容的な指導援助を行い、本

人のよいところを認め、ほめたことにより、A男の自信が高まり、集団もA男を受け入れるようになった。また、家庭訪問をしてA男を認め励ます機会を設けることを話し合い、家庭との連携も図ることができた。

多動傾向（LD）が原因となって集団不適応になった児童への指導援助の留意点

- LD児に対する援助の在り方について、担任が十分に理解する必要がある。
- LD児が集中しやすいように、座席の位置や周囲の友人に配慮する。
- 行動面の特性を他の子と比較せず、よい点をみつけて認め、ほめる機会を増やすようにする。
- 実態を的確に把握し、児童に到達可能な目標を持たせ、できた時にシールなどを与えて十分に認め、成就感を味わわせる。
- 援助の初期の段階では、意欲を喚起し持続させるため、失敗はできるだけさせないようにする。
- ルールの分かりやすい簡単な遊びなどを取り入れ、LD児も集団活動に参加できるようにする。
- 専門機関、家庭との連携を図り、共通理解のもとに、段階的に援助していく。